

朝鮮通信使再現行事

－ 下関の事例を中心に －

町田 一仁 (対馬博物館)

1. はじめに

(1) 下関市の概要

下関市は数々の歴史の舞台となった関門海峡を臨む本州の最西端に位置する中核都市である。人口は減少の一途をたどり、平成17年(2005)2月の1市4町(下関市、菊川町、豊田町、豊浦町、豊北町)合併時に30万人を超えていた人口が、令和2年7月末には258,609人となっている。合併後の面積は716.1km²に及ぶ。市域には綾羅木郷遺跡、梶栗浜遺跡、土井ヶ浜遺跡、長門鑄銭所跡、長州藩下関前田台場跡、勝山御殿跡など9件の国指定史跡がある。

(2) 朝鮮通信使について

朝鮮通信使は、朝鮮国が日本の要請により派遣した外交使節団であり、両国の交隣関係を維持するため、日本の統治者に朝鮮国書を伝達し、日本国書を持ち帰った。日本の室町時代に3回、豊臣政権時代の2回、江戸時代に12回来日している。なかでも、江戸時代の朝鮮通信使は豊臣秀吉の朝鮮侵略によって断絶した国交を回復し、その後260年余りにわたる両国の平和的な関係を構築したことにより、善隣友好の使節として特筆されている。

朝鮮通信使については、近年まで学界などにおいて積極的に研究されることはなく、その存在は広く知られてはいなかった。

しかしながら、1970年代から在日の学者などを中心として、その存在が見直され研究が進展していった。それを受けて、昭和60年(1985)に東京国立博物館、翌年に韓国中央博物館で「特別展観朝鮮通信

使一近世200年の日韓交流」が共同開催され、衆目を集めた。通信使を取り上げた初めての展覧会であった。その後、これらの動向に刺激を受けた通信使ゆかりの地の博物館学芸員や在野の研究者などによって、通信使関係資料が次々と確認され、彼らによって地域性をふまえた資料の価値付けが行われてきた。その結果、1990年代ごろから通信使をテーマとした展覧会やイベントが各地で開催されるようになり、通信使は国際交流や地域間交流、まちづくりのツールとなっていった。

一方、韓国で通信使が積極的に取り上げられ、本格的な研究が始まったのは、日韓ワールドカップの共同開催が決まった1990年代の後半からであった。それまで、韓国内では日帝強占期に強制された皇国史観の影響により、通信使を朝貢使として捉えており、その研究は長く忌避されてきた。しかしながら、日本の通信使研究の進展により、その誤解に気づき、このころから活発に研究が進み、今では日本を凌駕する勢いである。

平成29年(2017)10月には、日韓両国に所在する「朝鮮通信使に関する記録」111件333点がユネスコ「世界の記憶」に登録された。この登録について政府機関は関与せず、両国の2つの民間団体(財団法人釜山文化財団、NPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会)の共同申請によるものであった。

2. 関連する史跡の概要

(1) 朝鮮通信使遺跡について

前述のような状況から、自治体や国の朝鮮通信使

関連史跡についての認識は希薄であったが、通信使研究の進展とその普及に伴い、ようやく平成6年(1994)に「興津清見寺境内」(静岡県静岡市清水区興津)、「牛窓本蓮寺境内(岡山県瀬戸内市牛窓)」、「靱福禅寺境内」(広島県福山市靱の浦)の3ヶ所が「朝鮮通信使遺跡」として、国指定史跡となった。いずれも、朝鮮通信使が滞在した往時の遺構や建物が良好な状態で遺されている。

その他のゆかりの地にも通信使関連の遺跡が数多くあるが、通信使に対する認識の遅れなどが影響して、既に都市開発や港湾改修などが行われており、指定要件を充足するような物件は数少ない。しかしながら、対馬市厳原町の金石城跡のように、既に国史跡など指定されている物件について、後付けであるものの、朝鮮通信使に関連する史跡も少なくない。

一方、動産である有形文化財(特に美術工芸や歴史資料)については近年、各地において資料の掘り起しが進み、次々と重要文化財や地方指定の文化財となっている。

(2) 下関の朝鮮通信使関連史跡

下関の朝鮮通信使に関する認識の深まりは、他の地域よりも少し早く、平成元年(1989)からである。

これは、同年秋に下関市立長府博物館において、中国・四国・九州において初めてとなる本格的な通信使展を開催するとともに、通信使資料の調査・収集を始めたことによる。朝鮮半島出身者が多数居住する下関においても、当初は他の自治体と同様に朝鮮通信使に対して拒否反応を示していたが、展覧会開催を期に次第に認識を深めていった。今では市域に所在する通信使資料は16件35点を数え、そのうち5件10点がユネスコ「世界の記憶」に登録されている。

下関は、通信使最後の使行となった対馬易地聘礼を除く全ての回の通信使が寄港滞在した町であり、外洋と内海の結節点として使行の要地であった。

下関に滞在した通信使は、阿弥陀寺(現在の赤間神宮)と引接寺を客館としたが、それぞれが阿弥陀寺遺跡と赤間遺跡として、周知の埋蔵文化財包蔵地

となっている。しかしながら、これらから朝鮮通信使と関係する遺構や遺物が確認されているわけではない。また、朝鮮通信使船が着船した場所(阿弥陀寺前)についても、近代のたび重なる港湾開発により、往時の港湾施設は滅失してしまっている。

この場所で朝鮮通信使を想起させる唯一のものは、平成13年(2001)8月に市民の浄財によって建立された「朝鮮通信使上陸記念碑」のみである。

しかしながら、関連遺跡は滅失してしまっているが、通信使資料については市指定文化財やユネスコ「世界の記憶」(朝鮮通信使に関する記録)登録資料とし、歴史遺産としての朝鮮通信使の重要性の普及および朝鮮通信使の町・下関をアピールしている。

下記に指定およびユネスコ「世界の記憶」に登録された資料を列挙しておく。

- ・朝鮮通信使副使任守幹 壇ノ浦懷古詩(市指定、ユネスコ登録)
- ・波田嵩山赤間関朝鮮通信使唱酬詩並筆語書(市指定、ユネスコ登録)
- ・延享五年朝鮮通信使登城行列図(ユネスコ登録)
- ・金明国筆拾得図(ユネスコ登録)
- ・朝鮮通信使正使趙曦書帖(ユネスコ登録)

3. 朝鮮通信使再現行事がはじまった背景や経緯

(1) 下関市の朝鮮通信使事業への取り組み

先述したように、下関市の朝鮮通信使に対する取り組みは、下関市立長府博物館での展覧会開催、通信使資料の調査・研究から始まった。その後、下関市は対馬厳原町(現在の対馬市)および同町の実業家松原一征氏の呼びかけに応じて、平成7年(1995)秋に発足した朝鮮通信使縁地連絡協議会(のちのNPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会、略称「縁地連」)に設立メンバーとして加入した。

縁地連は、朝鮮通信使という歴史遺産を共有する自治体や団体が集い、地域間交流や共同事業の実施、通信使研究の進展を図るとともに、韓国縁地との交

流も促進し、日韓の友好親善に寄与することを目的として結成されたものである。

結成時は、韓国釜山広域市の影島区を加えた22自治体、通信使顕彰などを行う13の団体がメンバーとなっていた。現在は18自治体（平成の大合併による減→実質的には微増）、72団体、110名の個人会員で組織されており、組織内には研究部会および朝鮮通信使ユネスコ連絡部会の2つの部会が設置されている。また、「朝鮮通信使に関する記録」のユネスコ「世界の遺産」登録にかかる日本側の申請団体である。

縁地連に加入した下関市は、平成8年（1996）秋、釜山広域市との姉妹都市縁組20周年を記念して、第2回縁地連大会（朝鮮通信使ゆかりの町全国交流会）を開催し、朝鮮通信使に関する講演会・シンポジウムをはじめ開催するとともに、小規模ながら会場内で通信使行列再現を実施した。通信使衣装については、対馬朝鮮通信使行列振興会から借用した。

続いて、平成14年（2002）10月、韓国と日本の主要都市で開催された「JAPAN-KOREA市民交流フェスティバル2002」をNHKプロモーションなどと共同開催し、日韓文化公演会とともに初めて屋外で朝鮮通信使行列再現を実施した。衣装は対馬朝鮮通信使行列振興会から借用した。この行列には公募の市民234人が通信使衣装を着用し、市内の目抜き通りやコリアンタウンを進行した。

（2）朝鮮通信使再現行事の定例化

上記の行列再現などの朝鮮通信使イベントは、記念事業的な性格の強いものであったが、平成16年（2004）から行列再現を毎年実施して、これを定例化した。同年8月、下関市は同市最大の夏祭りである「馬関まつり」において朝鮮通信使行列再現を市民に披露した。これは、姉妹都市である釜山市の朝鮮通信使文化事業会（現在は釜山文化財団）の呼びかけに応じて実施したもので、以後、コロナ禍の令和2年を除いて毎年（16年連続）実施している。

朝鮮通信使文化事業会は、2002年の日韓ワールドカップ開催を機に朝鮮通信使顕彰事業を行うために設立され団体で、釜山市ではじめて朝鮮通信使行列

再現を実施するとともに、朝鮮通信使をテーマに多彩な韓日文化交流事業を展開している。その後、同事業会は釜山市とともに毎年5月、「朝鮮通信使祝祭」（朝鮮通信使祭り）を開催するようになり、そのメイン行事が朝鮮通信使行列再現である。現在、日韓両国で実施されている朝鮮通信使行列再現のなかで、もっとも華やかで大規模なものである。

同会は韓国内だけでなく、日本の関係都市に呼びかけて、朝鮮通信使行列再現や文化公演イベントなどの事業展開を行っている。現在、下関市をはじめ静岡市、川越市、台東区などで行われている行列再現や文化公演会は、同会を継承した釜山文化財団の協力により実現している。

下関市の行列再現では、通信使衣装（韓服）、正使が乗る輿、旗、武具などを釜山文化財団が提供し、行列を先導する日本の武士団の衣装は、対馬朝鮮通信使行列振興会が貸与している。行列編成は200人程度であり、公募の下関市民100人、釜山文化財団が募集した釜山市民100人が参加する。これに楽隊の役割を務める韓国の吹打隊、文化公演に出演するサムルノリや舞踊団などが加わって、行列を華やかなものとしている。

（3）朝鮮通信使行列再現のはじまりは対馬

ここで朝鮮通信使行列再現の起源を考えてみる。

朝鮮通信使行列再現は、対馬厳原の「厳原港まつり」に登場したのが、最初である。この祭りは昭和39年（1964）8月に初めて開催され、その後「対馬アリラン祭」「厳原港まつり対馬アリラン祭」と名称を替え、現在では「対馬厳原港まつり」となっている。この祭りにおいて、昭和55年（1980）に「李朝通信使行列」が仮装行列としてはじめて登場した（図1）。この行列を始めた人物は庄野晃三朗氏で、氏は厳原町で衣料品店を経営していた。氏は祭りにおいて、民踊や創作太鼓などの出し物を企画し実施してきた。この年の3月、映像作家で在野の朝鮮通信使研究者であった辛基秀が制作した記録映画「江戸時代の朝鮮通信使」を厳原で鑑賞した庄野氏は、この映画に感銘を受け、対馬の歴史と密接な関係に

ある朝鮮通信使行列の再現を決意し、私財を投じて衣装や道具類を調べ、李朝通信使行列振興会（のちに朝鮮通信使行列振興会に改称）を組織して、この年の港まつりから行列再現を挙行了したのである。これが現在、日韓両国の各地で行われている朝鮮通信使行列再現のはじまりである。朝鮮通信使行列振興会は、今年で結成40周年を迎えたが、その名は日韓交流の進展に伴い広く知られるようになり、各地の通信使イベントに招聘されて、通信使行列を再現したり、衣装の貸出や指導などに活躍している。釜山の通信使行列も当初は対馬の行列再現を参考にしたようだ。

（４）各地の朝鮮通信使再現行列

現在、朝鮮通信使再現行列を定例的に実施している都市は、次のとおりである。実施主体は自治体、民間団体、民団などである。

〔日本〕

対馬市：8月「対馬巖原港まつり」（図2、3）

下関市：8月「馬関まつり」（図4～7）

呉市（旧下蒲刈町）：10月「朝鮮通信使再現行列」（呉下蒲刈町 文化と歴史の祭典）

瀬戸内市（旧牛窓町）：11月「瀬戸内牛窓国際交流フェスタ」

京都市：10月「京都コリアンフェスティバル」

静岡市：10月「朝鮮通信使再現行列」

川越市：11月の「川越唐人揃パレード」

〔韓国〕

釜山広域市：5月の「朝鮮通信使祭り」（図8）

このほか、縁地連総会を兼ねて通信使ゆかりの地で毎年開催されている「朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会」では、大会のメインイベントとして行列再現を実施している。この大会は昨年で26回を数えるが、大会開催時に行列再現を実施した都市は、対馬市（4回）、新宮町（福岡県）、下関市（2回）、上関町（山口県）、呉市（下蒲刈町）、福山市（2回）、瀬戸内市（2回）、たつの市（旧御津町）、京都市、近江八幡市、彦根市、長浜市（3回）、大垣市（2回）、静岡市などである。この大会は、これまで釜山でも

2度開催しており、本年度も釜山開催の予定であったが、コロナ禍で中止となった。また、東京日比谷公園で開催される「日韓交流おまつり」などでも行列再現が行われている。

韓国内では、釜山文化財団がソウルをはじめ韓国各地の通信使イベントで再現行列を行っている。また、釜山文化財団は、日本のみならずニューヨークでも行列再現を実施するなど、豊富な資金力を背景に精力的な活動を展開している。

また、対馬市の行列振興会は現在、京都市および「朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会」開催地での行列再現に協力している。また、釜山の「朝鮮通信使祝祭」に武士団を派遣するとともに、岡崎市や大垣市などで開催される通信使関連イベントなどに通信使衣装を貸与している。

なお、呉市や瀬戸内市は自前で衣装や道具を揃え、行列再現を行っている。

（５）下関でのその他の朝鮮通信使再現事業

1）朝鮮通信使饗応料理の再現

下関市では平成19年（2007）の「馬関まつり」において、朝鮮通信使をもてなした饗応料理を再現した。この年は、江戸時代最初の朝鮮通信使が派遣された慶長12年（1607）から400年にあたり、各地で記念事業が開催された。

朝鮮通信使は江戸時代、下関に11回寄港しているが、再現する饗応料理は「長門下之関御馳走一番」と、長州藩による通信使応接が高く評価された正徳元年（1711）の使行時のものとした（後述）。

この回の饗応料理であった「五五三膳三汁十五菜」（本来は七五三膳であったが、この回のみ聘礼改変で五五三膳となった。）の全てを再現し（図9～13）、市内中心部の商業施設で市民に披露するとともに、夜には試食会も開催した。

その後、料理再現に携わった人形作家に依頼して五五三膳のレプリカを作成し、行列再現に合わせて毎年市民に公開している（図14）。

また、饗応料理再現で得たノウハウを活かし、山口県で平成29年（2017）11月に開催された「日韓海



図1 草創期の対馬での行列再現



図5 下関での行列再現 正使（釜山市長）



図2 対馬での行列再現（2019）



図6 下関での行列再現（祭り会場）



図3 対馬での行列再現の準備



図7 下関での行列再現 親書交換式



図4 下関での行列再現（吹打隊）



図8 釜山での朝鮮通信使祝祭 再現行列



図9 再現した饗応料理 五五三膳



図12 饗応料理を見学する市民



図10 三膳・本膳・二膳



図13 饗応料理の盛付け



図11 引替膳（三汁十五菜）



図14 饗応料理のレプリカ展示

「峡沿岸県市道交流知事会議」において、饗応料理の一部を再現して昼食に提供した。さらに、「朝鮮通信使に関する記録」のユネスコ「世界の記憶」登録1周年を記念して平成30年（2018）11月、市内の料亭において民間団体が「朝鮮通信使饗応料理 味の再現」を企画し、募集した市民50人が講義とともに、これを味わった。

2) 朝鮮通信使衣装の制作

平成19年(2007)は饗応料理の再現とともに、朝鮮通信使衣装の制作も行った。これは数年間継続して実施し、冠、帽子、沓、武具などの付属品を含め、正使、小童、軍官、訳官、文官、都訓導の衣装18着を制作した。これらは、行列再現時に展示するほか、市内で開催されるイベントや高校生などによる朝鮮通信使学習に活用されている。

4. 史実、再現方法、現代的なアレンジ、史実の伝え方

(1) 朝鮮通信使行列再現

1) 衣装や道具などの再現

朝鮮通信使については、行列図、人物や諸道具などを克明に模写した絵画資料が両国に数多く遺されていること、さらに、韓国に伝統衣装を制作する技術者がいたことなどから、当時と同じ衣装や諸道具を再現することが可能であった。また、行列の編成についても、絵画資料のほか文献も数多く遺されており、その全容は把握可能であった。ただし、通信使研究や史料の掘り起しが進んでいなかった草創期(対馬での行列再現当初)には、試行錯誤を繰り返したと聞いている。

下関市は、対馬朝鮮通信使行列振興会や釜山文化財団からこれらを提供されているから、衣装などの再現に苦労はなかった。また、平成19年(2007)の通信使衣装の制作は、地元の服飾専門学校が既にある再現された衣装を参考にし、韓国の技術者の指導を得て制作している。

2) 行列編成について

朝鮮通信使は400～500人で編成(対馬易地聘礼時は330人程度)されており、これを再現することは事務的・予算的に容易なことではないことから、下関市の場合は200人程度に簡略化して実施している。また、他の地域も100人～200人程度で実施する例が多い。ただし、対馬は300人、釜山はほぼ史実どおりに編成しているようだ。

道具などについては、対馬のみ随行警固の対馬藩

主や雨森芳洲を史実のとおり馬に乗せている。また、正使などが乗る輿は、各地ともにこれを昇くことが至難のため、輿の下に台車を取り付け、実際には押しているのだが、呉市(下蒲刈町)だけは史実どおり人力で昇っている。大変な力仕事である。

3) 現代的なアレンジ

朝鮮通信使は男性ばかりの集団であることから、本来は女性が参加できる役はないのだが、各地ともに男女の別なく通信使に扮装させている。また、行列の最後尾に史実とはかけ離れたチマチョゴリ隊を編成するなどして、女性の参加を促している。加えて、行列に華やかさを演出するため、行列再現とセットで実施されることが多い文化公演に参加するサムルノリや舞踊団が行列に参加することも多い。

対馬や釜山では、子ども用の衣装を作成して「子ども通信使」を編成し、行列に加えている。

朝鮮通信使は、善隣友好を双方で確認する朝鮮国書と將軍返書(日本国書)を交換することが任務であったことから、各地の行列再現では最後に国書交換式(下関の場合は親書交換式)を行う。国書交換は江戸で行うのであるから、道中である各地で行うはずはないのだが、行列再現を締めくくるものとして実施される。この行事は各自治体の首長と正使となった韓国からの来賓の間で行われることが多く、互いに朝鮮通信使の「誠信」の精神に学び、善隣友好を続けようなどのメッセージを交換している。この行事ももとをたどれば、対馬ではじまったものである。

(2) 饗応料理再現

下関で平成19年(2007)に実施した饗応料理再現は試行錯誤の連続であった。幸にも対馬や大学で文化8年(1811)の朝鮮通信使対馬易地聘礼時の饗応料理を再現した経験のある梅花女子短期大学の高正晴子教授、地元の人形作家や料理研究家、割烹旅館の女将と料理長などにプロジェクトチームに加わっていただき、何とか再現することができた。

1) 饗応料理の献立、調理法、盛付けなど

正徳元年(1711)の五五三膳三汁十五菜の献立は、

資料1のとおりである。山口県文書館が所蔵する「朝鮮信使御記録」などに食材を含めて記録されていた。しかしながら、調理法についての記載はなく、不明であった。各地の通信使記録を調べても、いずれも献立の記録はあるものの、調理法についての記載はなかった。唯一、宮内庁が所蔵する「朝鮮人登城之節饗応献立」に膳具の寸法や盛付とともに調理法が

記録されていたことから、これを翻刻して整理し、調理に臨んだ。ただし、調理法の記録されていない料理もあったから、これは割烹旅館料理長に検討・工夫してもらった。

儀礼膳である五五三膳は素木の三方、下輪、土器など寸法まで決まっているのだが、これを新調する時間と予算がなかったため、高正教授が研究用で所

資料1 再現した献立（1711年の饗応料理）

五五三膳（儀礼膳）

五五三膳は、本膳、二膳、三膳からなり、本膳には五品の菜、二膳にも五品の菜、三膳には三つの菜がのせられたが、儀礼膳のため実際に食することはなく、見るだけのご馳走であった。

〔本膳〕

- ・塩引盛 塩引鮭を花びら形に切り、廻し盛。
- ・鯛盛 するめを巻いてゆで、小口切りにして廻し盛。
- ・香物盛 味噌漬大根を花びら形に切り、廻し盛。
- ・福目 干鰯を細かく切り、福目形に振りかけて盛る。
- ・小桶 小桶に梅ひしおを盛る。

※ その他、食（飯）と塩。

〔二膳〕

- ・蛸盛 蛸の足を干して花びら形に切り、廻し盛。
- ・多利盛 塩漬にし、干した鮫の身を廻し盛又は小角盛。
- ・貝盛 ゆでた「あわび」の身を廻し盛、亀足付き、殻は金をかける。
- ・焼物 鯛切目、亀足付き。
- ・蒲鉾 蒲鉾五本を盛る、劔形の蒲鉾板、亀足付き。

※ その他、汁二品（塩鶴・松茸・麩せん・竹の子の汁及び鯛の汁）。

〔三膳〕

- ・船盛 伊勢海老の船盛、内にゆでた身を盛る。
- ・辛螺盛 ゆでた「にし」の三つ盛、亀足付き、殻は金二つ銀一つ（再現時は栄螺で代用）。
- ・羽盛 鴨の羽盛、背に盛る鳥肉は鴨でも良い。

※ その他、汁二品（ふくさ味噌仕立ての鯉の汁及び鱸の汁）。

勸盃式では、ひしお入りの吸い物、飾り物の鳥台、からすみを添えた押台、星之物二品（熨斗とのりがらみ）の肴が出され、茶菓子五種と呈茶で饗応の儀式を終了した。なお、儀礼膳のため膳具は素木の三方、食器は土器と小角が用いられた。

引替膳（三汁十五菜）

儀礼膳が終了し、少憩をはさんで、実際の食事である三汁十五菜の引替膳が出された。

〔本膳〕

膳（たい、くり、しそ、たで、葉生姜、きんかん）、味噌漬切焼鯛、香物、砂糖漬（豊後梅、勝栗）、浸物（海月他）の五品。汁（塩雁、生椎茸、小かぶ、つみれ）一品と食（飯）。

〔二膳〕

杉焼（鯛、くわい、木くらげ、銀杏、わり山椒）、切漬鮎、南蛮煮（家猪、根深）、鮓（ほたて）、山吹和の五品。汁（鱸と山椒）一品。

〔三膳〕

刺身（ぼら身付、かき鯛、さき海老他）、煎酒、生皮（鶏）の三品。汁（小菜と青豆）一品。

〔向詰〕

鮎焼浸（再現時は鯛で代用）。

〔引て〕

大蒲鉾・焼鳥（ひばり、うずら）、煮冷（竹の子、串海鼠、ぜんまい、小さざえ、つべた、枝山椒）、焼鮎。

この後、吸物（江鮎）、「肴」としてあわび田楽、にしめ麩、蒲焼が提供され、最後に素麺と菓子（ようかん、姫饅頭、ひし餅、金平糖、有平糖）が出て、宴を終えた。

引替膳には、内朱外黒の漆塗りに鶴亀と松竹の蒔絵を施した懸盤と碗、錦手伊万里焼の皿鉢、塗三方などの豪華な膳具が使用された。

「鳥台」と「押」

鳥台は饗応時に出される飾り物で盃をのせ、目出度い人形二つ、鶴亀と糸花（造花）などが配される。

この時の下関の饗応においては、鶴亀、松竹梅と下草の菊・水仙・木賊（とくさ）・つわを糸花で飾り、岩は金銀の彩画であった。同様なものに奈良台がある。奈良台は三方にのせられ、人形は三つとなっており、鳥台よりも格が高い。

押は饗応に出す肴物の台で、三方などを用いて糸花を飾り、取肴のからすみと箸をのせる。桃と若松を糸花で飾り、下草の堇は彩画であった。

持っていたものを譲渡していただいた。引替膳の塗三方や伊万里焼などの膳具は用意できなかったため、折敷と割烹旅館で使用している膳具で代用した。

料理を飾る亀足、押の糸花や人形、福目型、ひしお入れ、木土器、羽盛の鳴などは、翻刻した記録をもとに人形作家が制作した。

なお、食材については割烹旅館で調達したが、季節的に入手困難な食材は類似のもので代用した。

盛付けについては、各地に絵画資料が遺されていること、「朝鮮人登城之節饗応献立」に盛付けが詳細に記録されていたから、その方法は理解できたものの、料理長や料理研究家を含め経験したことのない手法であったため、試行錯誤を繰り返した。

2) 公開方法など

再現可能となった饗応料理について、出来るだけ多くの市民の見学してもらう必要があったことから、人出の多い市内中心部の商業施設で公開することとした。料理は生もののあり、仕込みにも時間がかかることから、公開の数日前から料理長を中心に仕込みに取りかかり、生ものは当日早朝に調理した。

また、説明パネルなども作成し、「食」を通して朝鮮通信使に対する理解が深まるよう留意した。公開場所の横には、再現した朝鮮通信使の衣装も展示した。

当日夜には、割烹旅館に行列参加者の来賓などを招き、引替膳を試食した。ただし、当時の調理法だと薄味であるので、料理長の希望で少し味付けを濃くして夕食となるようアレンジした。

3) レプリカの作成

饗応料理の再現は、何度も行うことは困難であることから、下関市ではレプリカを作成することとし、実際に再現に携わった人形作家に依頼した。作家は縮緬や紙粘土などを使用して、これを再現した。また、膳具などは再現料理に用いたものを再利用した。

このレプリカは、毎年行列再現時に公開しており、市民の通信使理解に一役買っている。

5. 運営体制

下関市では、朝鮮通信使に関する事業については、教育委員会文化課文化財係（現在の文化財保護課）が担当して実施していたが、平成16年（2004）からは市長部局の文化振興課が担当するようになった。

現在、担当課だけでは予算執行、参加者やボランティアの募集、事前の準備、実施などに労力を要することから、その多くを（公財）下関市文化振興財団に委託して実施している。

また、当初は学術的な助言を文化財や博物館関係者などの文化財保護部局の者が行っていたが、定例化した現在では特に必要とされていない。ただし、記念事業などの新規事業を行う際は、必ず文化財保護部局の朝鮮通信使に精通した者に相談があり、その者が主導して実施している。

このような運営体制のなかで、定例的に史実再現を実施する場合には次の点に留意しなければならないと考えている。

1) 真正性について

史実の再現にあたっては、古文書・古記録、絵巻などの様々な資料を読み解き、それに基づいて再現しなければならないが、推定しなければならない部分もかなり生じる。さらに、現代的なアレンジを加える部分もある。しかしながら、回を重ねていくとそのことが忘れ去られ、推定部分やアレンジ部分も史実と混同されてしまうおそれがある。

2) 史実再現の意義の継承

実施部局が文化財保護部局でない場合、担当者が定期異動などで3～5年単位で入れ替わる。自治体職員は優秀であるから、前年踏襲で準備に追われながらもイベント自体はうまく実施するものの、モチベーションの低下は避けられず、①に加えて史実再現の意義などが希薄となってしまう可能性がある。

これらを解決する方法として、①については、再現当初に史実どおりの部分、推定部分、アレンジ部分について区分けするとともに、推定についてはその根拠、アレンジについてはその理由などを明確に

示し、実施部局と情報共有する必要がある。また、毎年の実施前にこれを双方で確認するとともに、イベント参加者や観覧者にもその旨を伝達することが肝要であるとする。②については、史実再現を前年踏襲で実施するのは予算のこともあるのでやむを得ないが、研究の深化もあるから内容を定期的に見直して、史実再現をブラッシュアップしていくことが大事である。そのことにより、実施部局および文化財部局の職員の意欲の向上を図ることができ、史実再現を意義あるものとして取り組むことができる。そして、これらを実現するために、部局を越えたチームを編成して風通しの良い体制で臨むことができればと考えている。

6. 課題および今後の展望

朝鮮通信使行列再現などの通信使事業の定例化は、朝鮮半島と深い関係を有する下関市において、歴史の片隅に忘れ去られていた朝鮮通信使を市民が認識する格好の機会となっており、今後も継続していく必要がある。また、市民参加型のこのような事業は、歴史を身近に体感できるものである。

講演会やシンポジウムなどは、興味のある市民の参加のみであり、その人数も会場の関係で限定的である。再現事業を祭りなどのイベント時に実施することにより、十数万の市民が興味のあるなしにかかわらず再現行事を見学することとなり、町の歴史やその成り立ちについて意識するようになるのである。

特に朝鮮通信使については、歴史を活かしたまちづくりのみならず、足元の国際性やこれからの国際交流のあり方を考えるうえで示唆に富んでいる。

それゆえ、1990年代後半から朝鮮通信使ゆかりの地で行列再現など行われてきたのである。

反面、朝鮮通信使関連事業の実施については、日韓の政治的な関係に左右されることがよくある。昨年実施予定であった韓国で復元された朝鮮通信使船の対馬や下関への遠征寄港は、徴用工訴訟とその後の輸出規制の問題で頓挫した。日本の各地で行われ

た行列再現はこの問題で、その開催の是非が各自治体で検討された。「朝鮮通信使に関する記録」のユネスコ「世界の記憶」登録についても、外務省などは国内の嫌韓派の政治勢力に配慮して、非協力的であった。

しかしながら、政治とは関係なくこれらの事業を市民レベルで継続していくことが真の国際交流につながるものと信じている。それが朝鮮通信使の有する現代的な意義である。

【注記】

下関市において朝鮮通信使業務を担当する下関市文化振興課からの依頼により執筆したものである。報告者は平成31年3月末まで下関市に在職し、文化財保護課長や歴史博物館館長などを勤めた。

【参考文献】

- 1) 村上和弘 2014「朝鮮通信使行列と〈日韓〉交隣」『対馬の交隣』交隣舎出版企画 pp.17-30
- 2) 町田一仁 2017「朝鮮通信使に対する取り組み 下関」『朝鮮通信使地域史研究』第2号別冊 縁地連朝鮮通信使関係地域史研究会 pp.15-19
- 3) 和田清美・魯ゼウォン 2020『海峡都市・下関市の生活世界:交流・連携,在日コリアン,まちづくり』学文社 pp.105-131